

社乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

創刊号

平成元年12月23日



大嘗祭（おほにへのまつり）

平成の御世に幸多かれど
天皇さまがご即位にあたつて 太古の昔ながらに
すめらみことの神祭りをなされます

天皇さまが 国の象徴として国民の総意を体現されるのは
昔ながらの王として 国や国民の平和と繁栄のために
親しく神々にお仕えされるからこそなのです

その最初になされるのが 平成二年秋の大嘗祭です
神さまから授かった 尊い稻の収穫を祝い、
神さまと共に初穂を召し上がるのが 毎年秋の新嘗祭（にひなめのまつり）

一世一度 国を挙げての大きな新嘗だから 大嘗祭なのです
世の平和と繁栄にいつも神の恵みと祖先の恩とを忘れない
私たちの床しい心根を ござつて世界に示そうではありませんか

平成の春

激動の 昭和をしのぎ
平成の 春をむかへり
やがて来る 稔りの秋に
國祝ぎの み祭りを待つ

とつおいつ 吾らが祖は
まことにも 宮に仕へり
ももとせの 激しき世々に
ふるさとの 心変へじと

ひとは皆 時の子にして
今はや 語らぬ祖も
かへりみて 足れるもあらむ
足らざるもあらむ

あたらしき 御世をむかへて
吾らまた 同じき道ぞ
なにを探り なにを放つか
こころして 見よ

解説 秩父神社(一)

御祭神と柞の森
禰宜 浅見 武史

秩父市の中間に位置し、秩父盆地のシンボル武甲山を巽(東南)に仰ぐ聖地、「は、その森」に二千有余年前より変わることなく、秩父神社は秩父郡中の総鎮守として祀られてきました。神社にとって鎮座地、すなわち神靈の鎮まりとどまる土地。社殿の築かれた場所は重要な意味をもちます。

近年、「ははその森」は「柞森」と書きます。「柞」はアザ科のナラ・クスギ等の落葉樹を総称する言葉ですが、古くは「汲播蘇」「波波曾」「葉葉染」「母巢」とも記した時代がありました。

万葉集 第四一六四首に「知智乃実乃父能美許等、汲播蘇葉乃母能美已等於保昌可余情盡而(下略)と詠まれ、父・母・枕詞として「乳の実の父・柞葉の母」の思いは、遠く万葉の人々に広く親しまれておりました。知知夫・大神の神靈鎮まります社、それが「ははその森」なのです。神社縁起に、西行法師の作と伝える歌があります。

柞原月の桂にさえられてよしのはらむは誰子なるらむ

西行

妻ならで露を結ぶのちちぶねは

柞の原に薄はらめる

翁の返し

「柞原」は柞が多く生えた原を指し、鬱蒼とした当時の「柞森」が連想されます。

江戸時代、寛政二年の古地図には「妙見社中境内地一万一千四百八十四坪」と記し、杉檜櫻の大木が生い茂る社叢盛んなさまが見事に描かれています。

蘭田家文書、宝暦年間および嘉永年間の記録によれば、幕府の二度にわたる境内木四十本供出の下命も、多くの氏子の懸命の努力により、社叢の景観を保つことができたと誌しています。

今、永い歳月を息づいてきた「柞森」も、近年の都市化の影響を受け、昔日の樹態の姿はありませんが、昭和の御社殿ご改修(四十一年～四十五年)を期

に、「柞森」復興につとめております。現在の境内地は約六千坪であります。



当社ご祭神には

八意思兼神(やこころおもいかねのかみ)
知知夫彦命(ちちぶひこのみこと)

天之御中主神(あめのみなかみのかみ)

秩父宮雍仁親王

(ちちぶのみややすひとしんのう)

の三神一柱をお祀りしています。

八意思兼神 紀一書に「有高皇產靈之息兼神者、有思慮之智」とあり、多くの人の思うことを一人で兼ねて思う神のご神名で、思慮深い神の代表です。記紀「天岩戸神話」の段に、ご神徳のさまは詳しく描写され、その神話をもとに秩父神樂は思兼神のご事跡を今に伝え、黙劇として演じてあります。政治・学問・工業の祖神として篤い崇敬を集めています。

知知夫彦命 国造本紀に八意思兼神の十世孫とあり、瑞籬朝(崇神天皇)の御世に初代の知知夫国造に任せられ、秩父地方開拓の祖となり、郷民に広く養蚕の業を授け、神祖八意思兼神を奉斎しました。

秋ふかき日に柔道を見るこの御製は当時の柔道関係者により、額殿奥深く納められております。毎年五月三日、秩父宮祭が宮会会員多数参列して、厳かに斎行されます。次回は歴史について述べることになります。



天之御中主神 記序文に、「參神作造化之首」とあり、高御産果日神、神产巢日神とともに高天原に生まれ給うた神。妙見信仰と深い関わりをもつ神であります。宇宙の主宰として近年宇宙開発、人工衛星打ち上げに際し関係者の深い崇敬を集めています。

秩父宮雍仁親王 大正天皇第二皇子として淳宮と称せられ、大正十一年秩父宮家の称号のご宣賜あり、同年当社にご親拝を仰ぎ、乳の木壱樹御手植を賜りました。登山をはじめ広く各種スポーツを奨励され、代々木の秩父宮ラグビー場の名は殿下の御名を戴くものであります。昭和二十八年一月四日薨去遊ばされるやご遺徳を偲び、慎んで

ご尊靈を当社相殿に奉廟いたしました。去る昭和四十年秋、墳玉國体に際し昭和天皇行幸の折、御製を賜りました。弟をしのぶゆかりの館にて

明日の御社運を想う

宮司 薩 田 稔

平成元年十二月三日、このよき日に新しい御世の記念すべき例大祭も無事の斎行を得て、当社もいよいよ新時代の体制を迎えるとしております。草の根の田舎神主を自認しながら過去六十年あまりを昭和天皇に仕えてきたという感慨をもつ先代が、それゆえに今春勇退して名誉宮司となり、かくいう私が当代の宮司を拝命してから早くも八ヶ月がすぎようとしております。かねて覚悟の天職とはいえ、外遊なれば御世替わりに加えて帰国早々の拝命とあって、心慌ただしく身辺を処するに精一杯の日々でしかありませんでしたが、いまはようやく心をしめて今後の御社運を想うことができるようになりました。

年來の課題であつた「ははその杜」発刊もその想案のひとつですが、これを機会に今後の当社経営をめぐる構想の一端を申しのべたいと存じます。

まずは当面の平成二年十一月に國を挙げて奉祝いたします新天皇陛下の御大典（即位礼、大嘗祭および大饗）を記念する境内整備事業として、当社の御神門、瑞垣、神楽殿および神札授与所の改修があります。これらの施設は、ちょうど六十年前の昭和天皇御大典を記念して当社が国幣小社に昇格した際、当時の秩父セメントをはじめ地元企業、団体、氏子崇敬者の奉賛によつて建造されたもので、以来その優雅華麗なたずまいが秩父總鎮守にふさわしいものであります。ところが近年、工場からの降灰や自動車などの排煙により、せつかくの彫刻や朱塗の造作が痛んだうえに、心ない人たちが處かまわずに貼る多数の千社札のために往時の魅力が半減してしまつたのです。そこで、かつて縁りの御大典を好機として、再びその魅力を復興すべく関係各位の浄財を募つて、それらの塗り替え修復を行なうものであります。これは平成最初の事業として早速とりかかる予定であります。

ひきつづき第二の整備事業は、今後増加する神社活動のための本格的な関連施設を充実するもので、これも懸案の老朽化した旧參集所の撤去とともに旧社務所の移転と新館の建造であります。この新館は、いま境内前庭にある旧社務所を北西奥の旧參集所跡に移転して主に神職の斎館に供し、その跡地をやや拡大して秩父まつり会館側から境内への通路ともなる、広いロビーを備えた崇敬会館の構想であります。その一階は、出来るだけ広く開放的なロビー空間とし、普段は参拝客の休憩にも市内氏子の皆さんとの自由な出会いや触れ合いの場に供するものと

したい。二階は、職員の宿泊施設、社務関連施設のほか氏子崇敬講、氏子青年会、婦人会など関係団体が共用するものとしたいと考えております。

現在の当社境内の施設には、おかげさまで祭祀関係にはほぼ満足すべく一応整備されていますが、それにひきかえ氏子崇敬者の皆さんに供すべき配慮にまだ欠けるところがあります。「ちかごろ街なかの神社は、氏子の憩いの場であつたことを忘れてしまっている」という或神道学の権威の苦言は、残念ながら当社の場合にも当てはまるといわねばなりません。この現状を改めるとともに、祭りの時に限らず普段も、真に「街の氏神さま」として、世の利害を超えた市民のいわば心のコミュニティ・センターになることが当社神職一同の夢なであります。

それについても、まことに気がかりなのは当社ゆかりの「ははそのもり」の現状であります。神社第一のシンボルであり、その生命と言つても過言ではない筈の御神苑の整備は、ことさらここで申し上げるまでもなく当社の一貫した事業でなければなりません。つね日ごろ、機会あるごとにご理解を賜っておりますように、もと日本の神々のやしろは杜、つまり森そのものであったところに、他の宗教はない、いまの自然破壊の時代にこそ誇るべき深い意義をもつてゐるのであります。江戸時代の秩父郡民は、幕府役人の下命をねかえしても当社の柞（はは）の森を守り抜いたとのことです。それもわが鎮守の森なればこそその先祖の心意気があつたと思われます。近代は、その尊い自觉もいつか失われ、森の地下水を断ち、道路に削り、煙害に晒してしまつて、かつては万葉の古歌にならつて「ちちの実のちちぶのさと、ははそ葉のははそのもり」とうたわれた鬱蒼たる御神苑も、いまは見る影もなく寂しい姿になつてしまつております。ほんのひと昔まえまでは、天然記念物の渡り鳥ブッポーネーの棲息地としても貴重な森でした

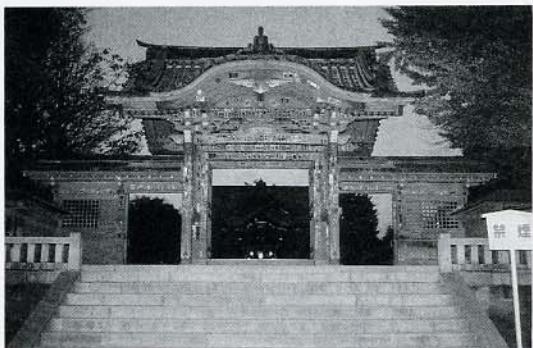
当社では、すこしでも現状の林相を改善しようとかねてから努力しておりますが、なにぶん市街地の中央を占める位置にあつて思うにまかせぬところがあり、事の性質上數十百年の辛抱抜き手当が必要であります。せめてもの願いは、どうか市民の皆さんのが大切にしてきた、この「ははそのもり」を私どもと共に育成してほしい。この社報をその名にしたのも、実はここに理由がある



さて、よくご承知のように、この我らが郷土は遠いむかし「知々夫之國」と呼ばれ、武藏の國の成立よりも以前に開拓された古い土地柄であります。古代の大和朝廷が地方を治めるのに当初は「くにのみやつこ（国造）」という地方長官を任命したのですが、秩父にもいちはやく知恵の神、八意思兼神の十代めの子孫である知々夫彦命がこの長官に任じられて「大神」をお祭りしたと、平安時代に書かれた中央の古文書『国造本紀』にとりわけ詳しく記されております。この「大神」さまが、はたして八意思兼神なのか何の大神なのか議論の分かれるところですが、私どもは当社が伝える信仰による以上はそのどちらでもあると考えております。「大神」とは、つまり秩父の大きいなる地主の神、國魂の神としての大國主神であられるのです。古くは、この秩父地方の風土全体を守つて下さる國魂の神として特別お名前を呼ぶ必要もなく、ただ「大神」と称え申し上げたに相違ないのですが、のちに中央の歴史にかかわって特殊な御神格を帯びられるようになります。しかも、この神様が鎮まるところが武甲山である。このことは、当社鎮座の位置と方角、冬祭りの斎場の位置と方向、それに春祭りの田植え神事の内容やその冬祭りとの関連などから考えても、正面の武甲山が古来「大神」の鎮まる「かむなび」、俗にいう神体山であることは確かであります。中世から近世まで当社が妙見宮を名乗つた当時、武甲山もまた「妙見嶽」と呼ばれたのも、この深いつながりがあつたからでありましょう。

その武甲山も、また全山石灰岩であったがために近代産業の有利な資源となり、セメントや窓素肥料などの原料として大量に掘削され、いまではあれほど雄渾で美しかった山容も、見るに忍びがたい姿になつてしましました。

古くから、秩父大神の鎮まるお山であり、かつて日本百名山の一つとして秩父郡民の郷土愛のシンボルであった武甲山を、住民の生きるためにいえ無惨に堀り崩してしまったことは、いまさらながら私も郷土に生きる者にとって深い心の傷となつてしましました。秩父の風土に鎮まる神々を祭り継ぐ神職として、武甲山を拝する当社の神主として、この負い目をどう償うか。これまた、当社の御社運を担う者として宮司の重い課題なのであります。せめて今、当社神職にかなう手立ての一つは、神恩感謝の冬季大祭にいさぎかなりとも神靈鎮魂の素意を表することにあると思つております。



表紙説明

知々夫彦 まもります町ぞ

皇子の宮の 御名におふまちぞ

さかえしめなむ

佐々木 信綱

この歌は、昭和三年八月に当社を参拝された佐々木信綱氏が詠まれたものです。同氏は当時を代表する歌人の一人であり、また国文学者でもありました。特に万葉集の研究でも知られ、自ら詠まれた歌も温和で平明な歌風を好まれたようです。歌中の「知々夫彦」は秩父の開拓の祖神であり、当社のご祭神であります。「皇子の宮」とは、当時ご健在の秩父宮雍仁親王を称え申し上げたものです。

【柞乃杜】題字 宮司 蘭田 稔筆 伊古田 紗子

当社の諸祭礼につきましては、つぎの機会ということにいたしまして、最後にこの秩父地方の社会的発展と当社の御社運とにかかる提案の一つを申し述べることにいたします。申すまでもなく、今後の秩父地方の健全な発展には、この恵まれた自然環境と豊かな文化風土とを一層大切にすることが是非とも必要であります。これほど首都圏に近く、しかも山ふところの独立した自然風土を保つてゐる土地柄は、とくに首都圏西部の大都市住民にとつてはかけがえのない気軽な心身の保養地であります。けつして大げさな観光地ではありませんが、いわば日常生活の延長として都市住民が家族ぐるみで、観光や教養や休養のために年に何度も訪れるという典型的なりゾート地域であります。「観光」といつても、ひとをアツと驚かすような資源があるわけではなく、むしろ本来の意味で「人間味ゆたかな生活の光を見る」たぐいのものであることが秩父にとって適切であります。祭りもまた、そうした生活表現であり、生活文化の華であるが故に、そうしたことに対する限りない魅力なのであります。そうした秩父の個性的魅力をますます高めるためにも、秩父の歴史風土の拠点である秩父神社と、その生活文化の華である祭礼文化とを大切にしていたかねばなりません。

そのための強力な新しい文化施設として、ぜひとも市民の総力で実現したいのが、「秩父祭礼博物館」なのであります。いまのところ日本になく、世界にもない、秩父にこそふさわしい祭礼文化の博物館を市民の総意で造ろうではあります。その詳しい構想は、またの機会に報告させていただきます。

ユーロパリア参加報告

権 翡 宜 新 井 直 行

去る九月二十六日から十二月十六日までのおよそ三ヶ月間、EC（欧州共同体）のかなめ、ベルギー王国に於て、ヨーロパリア89ジャパンなる欧州最大規模の日本文化芸術祭が開催されました。

おそらく二十世紀にまたとない日本文化紹介の最大イベントに違いないことでしょう。この八十日間あまりのうちに約百二十もの多彩なプログラムが、首都ブリュッセル市を中心に各地で展開されました。今秋のヨーロッパは日本一色、なんて少し大きさでしょうか。そのくらい西欧諸国にとって今の日本は大きな関心の的になつているようです。

このヨーロパリア日本祭に、日本文化の根幹となる神道文化“まつり”を軸に神社界の参加が強く求められました。ここに

いうことで、かなりの負担ではありました。幸いに「秩父祭屋台囃子のベルギー公演を励ます会」の絶大なご後援を得て、今回参加の決まつた「秩父郷土会」の若いメンバーは期待に胸ふくらませたのでした。

九月二十六日の開会式は、ブリュッセル市内、パレ・デ・ボザール（美術宮殿）に於て、ボートワン国王・王妃、そして皇太子殿下のご臨席の下、各代表の挨拶と宮内庁樂部の雅樂・舞樂が奏され、格調高いものになりました。

翌二十七日、秩父囃子連は、ブリュッセル市中心部にある王立モネ劇場（オペラ・バレエの殿堂）前広場の特設舞台で、計三回の公演を致しました。ジャパンセントラ開場と、オーブンングイベン開始との文字どおりユーロパリアの開幕というわけです。まず最初に、修祓を行なつたのはいうまでもありません。

センターオープンのレセプションは昼食を兼ねたパーティ形式でしたが、その席上、袴縫引姿のメンバーの人気は大変なものでした。それにも「ニンジャ?」と言わされたのに皆大笑い。白衣姿が「ハラキリ」とは、驚くやら納得するやら。

三十日からよいよパレード参加。地元の巨人形やバンシューといった民族衣装の人々との共演。気になる山車の仕上がりもまずまず、夕刻から提灯に火を入れ、行列の出発となりました。二十八日はルーベン市立美術館、「富岡鉄斎展」の開会に併せての公演となりました。開演が夕刻のため、特に許可されて提灯が使え



たのは効果的でした。

翌二十九日からの三日間は、ブリュッセル市内オート通りに面したブリュッセル地区のフェスティバルパレードに参加。「日本のまつり」と題し、青森のねぶたグループと、山形の花笠グループとの共演となりました。急ごしくえながら動きのある屋台でのパレード参加という意味で、いよいよ秩父祭屋台の本領發揮というところでしようか。二十九日は屋台作りにも熱が入りました。とはいっても道具もない海外が初めてのメンバーバカリ、最初は言葉の心配ばかりでしたが、終わってみると、「心配したほどじゃないね、要はハートだよ」なんて誰かが言つてましたつけ……。

初めての海外公演、それぞれに得たものは多かつたようです。今度こそ本物の山車をヨーロッパに紹介したいものです。



ただ準備期間が短く、しかも全員自費参加と



入場も、まさしく山車がお旅所に向かう雰囲気そのもの。メンバー誰しもそう感じたのではないでしょか。最後のクライマックス、演ずる側、観る側の一体という感じは今回ユーロパリアの参加を実感させられるものでした。

翌十月一日、コスモ同じパレードでしたが、最後にブリュッセル商工会代表から記念の盾と感謝状がそれぞれ渡され、「私どもは、日本のまつり、そして皆さんを迎えた事を光榮に思っています。今回ブリュッセル祭がこんなにも素晴らしいものになつたのは皆様のおかげです」と挨拶を頂いた時、一同大役を果たしたことを見致しました。

海外が初めてのメンバーバカリ、最初は言葉の心配ばかりでしたが、終わってみると、「心配したほどじゃないね、要はハートだよ」なんて誰かが言つてましたつけ……。

初めての海外公演、それぞれに得たものは多かつたようです。今度こそ本物の山車をヨーロッパに紹介したいものです。

梶だより



◆秋の社頭風景

境内のイチョウも日に日にその装いを凝らし、実りの秋を色濃く印象づける。そして、氏子の方々におかれても様々な人生的節目を迎えた。生後三十日余での初宮詣。新たに親となつた両親と、まだ若い祖父母たちの喜びは隠しきれないものがある。心温まる風景のひとこまである。十一月十五日は七五三詣。我が子を健やかに育てと思う親心は、今も昔も変わりない。大神様のご神徳を戴いて、益々すくすくと成長されることだろう。また新たに人生の門出を迎えられた方々も数多くいらっしゃる。子供の頃より慣れ親しんだ氏神様の大前で将来を誓い合った方々。その行く末の幸せをお祈り申し上げるものである。このように秩父神社の秋の境内風景は、親から子へ、子から孫へという悠久の歴史の中で、氏子と共に過ぎて行くのである。

◆三道大会優勝旗奉納について

秩父ロータリークラブ（会長 丸岡只一氏）は、創立二十五周年を迎えるにあたり、秩父神社三道大会の優勝旗（計十二旗）を奉納された。大会の主旨であるところの地域社会奉仕の精神を以て、戦後人々の精神向上に尽力してきた同大会の成果を認めたうえで、今後の益々の大会の発展に賛され、その意図に即した青少年育成に託されたものである。神社としても、これを期に初心に帰つて、同大会の精神を改めて再認識するものである。

◆ 菊花展について
秩父市菊花愛好会が創立三十五周年を迎えた。当社では毎年十一月一日より十五日迄の間、境内において菊花の奉納を戴いている。とりわけこの時期は七五三詣にあたり、晴着姿の我が子と、大輪の菊の前で記念写真を撮る姿をよく見掛ける。まことに微笑えましい光景である。末永く同会が続きますことを祈念申し上げると共に、会員皆様方のご努力に敬意を表したい。

◆ 大嘗祭についての署名活動

今秋の初めより、境内神社所傍らに参拝者の署名用紙が置かれた。主旨は今上陛下の即位に伴い、皇室の伝統に即して行われる大嘗祭が、国家の儀式として正当に行われるようについてものである。

参拝者の署名用紙が置かれた。主旨は今上陛下の即位に伴い、皇室の伝統に即して行われる大嘗祭が、国家の儀式として正当に行われるようについてものである。

◆ 大祓式申し込みについて
秩父神社においては毎年六月の三十日、並びに十二月の三十一日に大祓式を行っています。これは半年間の罪穢を人形に託して清め、これから幸運を祈る行事として往古より宮中の行事、また各地の神社、あるいは年中行事の中にその例を見るることができます。特に十二月三十一日に行われる大祓式は、今年の罪穢を祓清め、すがすがしい気持ちで新年を迎えるでしょう。何かとせわしい今日において、一年の節目にされてはいかがでしょうか。

◆ 大嘗祭についての署名活動
式は、今年の罪穢を祓清め、すがすがしい気持ちで新年を迎えるでしょう。何かとせわしい今日において、一年の節目にされてはいかがでしょうか。

御案内

◆ 大祓式申し込みについて

これまでに秩父郡市内外を問わず、数多くの方々より貴重なる署名を戴いた。神社側の予想を上回るその数に改めて氏子の方々の関心の高さを知らされた。ともすると、マスコミ等では皇室に好意を持たない思想家の反対意見を故意に多く取り上げるが、国民の多くは皇室に好意を抱いており、先の昭和天皇の大葬礼の折、国の行事と皇室の行事とを分けて行うという異例の良いものです。午前〇時を以て新年の太鼓を合図に、老若男女を問わず、毎年多くの方々のご参拝を戴いております。各々に願いは異なるにせよ、新しい年を迎えた喜びに、皆晴れ晴れとした表情になります。

◆ 節分祭申し込みについて
当社では破魔矢、熊手、絵馬等様々な授与品を用意のうえ、夜を徹して皆様のご参拝をお待ちしております。

当社では春を呼ぶ行事として、当社では永きにわたり、節分祭を行つてきました。神父の春を呼ぶ行事として、当社では永きにわたり、節分祭を行つてきました。



した。それに伴い皆様方の厄除祈願を承っております。これまでに無事過ごせたご加護を感謝し、厄払い、一層のご加護を願います。また古くは神祭りをするべき年令を迎えた者を年男と言つた例もあるようです。

男・二十五歳、四十二歳、六十一歳、女・十九歳、三十三歳、三十七歳などを厄年と言います。中でも男の四十二歳と女の三十三歳は大厄とされています。体質の変わり目としても重要な年頃です。お祓を受けられてはいかがでしょうか。

◆ 古文書等募集

◆ 初詣について
新年前日迄に社務所まで

◆ 古文書等募集
前日迄に社務所まで

◆ 神社の古文書等募集
前日迄に社務所まで

◆ 神社の古文書等募集
前日迄に社務所まで

◆ 神社の古文書等募集
前日迄に社務所まで

◆ 神社の古文書等募集
前日迄に社務所まで



謹みて

あら玉の年の言祝ぎを
申し上げます



◆職員紹介

前列右より

権禰宜	大澤 孝
権禰宜	前原 利雄
権禰宜	浅見 武史
名譽宮司	池永 道紀
権禰宜	新井 直行
御用部	深田 高子
御用部	糸永 知子
権禰宜	枝窪 邦茂
権禰宜	新井 君美
巫女	千島 明子
巫女	八木 政江
巫女	河合彩也子
巫女	権禰宜
巫女	権禰宜
巫女	権禰宜

◆投稿のおすすめ

この社報を氏子の方々との絆とすべく、皆様のご投稿を募集しております。神社や祭の思い出、とておきの昔話、郷土秩父の将来、神社へのご要望など何でも結構です。ご投稿をお待ち申し上げております。ご記入、職業、電話番号を明記のうえ、当社までお送り戴ければ幸いです。

活動の方針といたしましては、特に分野を限定する訳でなく、会員の皆様の関心に合わせて、いくつのかのサークル活動を組み入れたいと考えております。たとえば、祭礼研究会、郷土芸能の会、郷土史探訪会、社会奉仕の会、趣味を育てる会などはいかがでしょうか。是非ご参加のこと、お待ち申し上げております。

◆氏子青年会々員募集

当社では平成二年四月より、氏子青年会を発足いたします。つきましてはその会員を募集しております。秩父市在住の青年男女の方で、郷土文化の継承発展に意欲をお持ちの方、当社社務所までご連絡下さい。

秩父の総社として永く守られてきた秩父神社が、新時代を迎えるにあたり、氏子の皆様方との結び付きをより一層強固なものにするため、その具体的な媒体となるべくこの社報は創刊されました。神社をより身近なものとし、祭りの心を再認識して戴き、より良い神社の在り方、また祭りの方向性を皆様方と共に模索して行きたいと思います。これからも尚一層のご協力、ご理解を戴きたいと、この場を借りてお願ひするものであります。

最後になりますが、何としてもすべて初めての創刊につき、何かと不備な点も多々あると思いますが、将来も続けて行くための叩き台としていきたいと思いますので、皆様の叱咤、激励をお待ち申し上げております。

編集後記

平成元年(令和元年)十二月二十三日
発行所 秩父神社
〒360-0001 秩父市番場町一一一
FAX(049)221-5562
TEL(049)221-5563
編集 新井直美
印刷所 有限会社 拡文社
〒360-0001 秩父市東町二十七八